

# イエスの祈りと念仏

坂東性純

はじめに

キリスト教と仏教の対比はこれまで数多の人びとによって試みられてきた歴史をもっている。しかも近年に至って漸くこれまでの杜撰な対比の域を脱して、従来なされてきた実例の示す数々の欠陥を批判的に反省し、是正した上で、より公正で精密な比較・考察の試みがなされる段階に入ろうとしている。しかしながら、人為のもつ当然の限界として、考察者がこれまでどちらの思想の影響をより強く受けてきたかによって考察の基準が異なるといふ免れがたい問題がある。よほど両者の思想そのもの、乃至は生成基盤・背景に通じたものでなければ意義ある対比すらも為しえないと思われることである。出来うべくんば、これまで先人の明らかにし得た成果の上に立って、一層、深化・発展せしめるこ

とが望ましいことであるが、個人の能力には限りがあり、その欠陥は第三者の具眼の士の指摘や是正を待つ外はあるまいと思われる。

ここに取り上げたのは、キリスト教の伝統に属するには違いないが、カトリックやプロテスタントの流れではなく、正教会、あるいは東方教会の呼称を以て知られる流れの中に伝承されてきた「イエスの祈り」The Jesus Prayer と、浄土門仏教において行われている称名念仏との対比である。「イエスの祈り」は、また、「心の祈り」The Prayer of the Heart とも言われ、キリスト教の歴史の中において発生したさまざまな祈りの中では、最も単純で最も豊かな内容を宿すものと言われる。一般にキリスト教と仏教との対比においては、仏教の中でも特に浄土門の教えが一番近似性をもっていると言われる。また、「イエスの祈り」はキリ

スト教世界のすべての流派で等し並みに用いられているものではないとは言え、やはり共通の聖典たる『聖書』にその根拠をもっていることが知られている。「イエスの祈り」と称名念仏は全くあい異った要因のように思われるが、それぞれなりの伝統の宗教的実践の極まりを示すものと見做されうるふしが多々認められるので、この両者の異同を吟味してみるのも、両教の性格探究の一端として、強ち無意義な試みではなからうと思われる。また一般に知られていない幾つかの側面に照明が与えられるなどして、両教の対比に新しい素材が提供できるならば、この些やかな試みも、それなりの意義を帯びることになる。ただ筆者はこれ迄仏教学の分野に身を置いてきた者であり、キリスト教に関する知識は極めて貧しく、浅薄の譏りを免れないので、文中筆者の犯すかも知れぬ思わぬ錯誤や意味の取り違いなどに関しては、読者諸賢の是正とご批判を乞う次第である。

### 「イエスの祈り」について

「イエスの祈り」とは、ふつうその形は英語では“Lord Jesus Christ, Son of God, have mercy upon me, a sinner.”(神のみ子・主・イエス・キリストよ、罪人われを憐れみたまえ)であるが、時には、「神のみ子」や「罪人」が省略される場合もあり極端に切りつめられる場合には「イエス」の一語のみが残される。ふつう。ギリシヤ語では、ふつう“Kyrie eleison.”(主よ憐れみ

たまえ)が称えられ、これが「クレイソン」、遂には「クレイソン」となり、呼吸と共に発せられるように簡略化されるといふ。これは、称名念仏で言えば、博多の七里恒順師(1885—1900)に嗣法された伊勢の村田静照和上(1885—1932)の「ナーナー」という念仏を想起せしめる。この両者に共通して言えることは、言葉の省略は必ずしも原意の省略を意味するものではないことである。つまり、最も簡略化された言葉を称えている人でも、その意識内容においては、原の言葉とその意味が潜在的に保持されていると考えられうることである。これは他の事例を以て譬えらば、草書を書いている人は、心の裡ではその字の楷書形が意識底に保たれているようなものと言つてよいであろう。この「クレイソン」の実践は現在でも、エーゲ海の北、西から東へ突き出た三つの半島の最北部にある女人禁制のアトス山 Mt. Athos で、多くの修道士たちが、ロザリオを爪繰りながら行っているのを見ることが出来る。これは定型化した儀式の一環としてではなく、日常生活のまっただ中で、それこそ時処所縁を問わず、始めは口称により、遂には心臓の鼓動と共に心の内で自動的に称えられるようになることが期待されているのである。「イエスの祈り」がまた「心の祈り」とも呼ばれるのはこのためで、この場合の「心」とは、口称に対する「内心」の意と、人の意志を超えて生きている間中鼓動を止めることのない肉体の中心としての「心臓」が意味されている事実は注意されてよ。

この祈りは、聖書に基いていることは確かであるが、このような形で用いられた始めは少くとも紀元六世紀以来、シナイ山 Mt. Sinai の聖カタリーヌの僧院において用いられていたことが知られている。十四世紀になって、それがシナイ山のグレゴリーによってマケドニアのアトス山に齎らされた。そこでグレゴリーは、アトスで瞑想に没頭したり、苦行を行なっている僧たちが他の祈りしか知らなかったので、『新約聖書』(エテサロニケ 五・一七)にある「絶えず祈りなさい」という聖パウロの教えに則って、この「イエスの祈り」を教示したという。爾後聖なるアトス山は、「イエスの祈り」の中心地となって今日に至っている。

多くの人びとがこの祈りの実践を始めるや、自らの体験を綴った書き物が著わされ始め、十八世紀に入ってから始めて『フィロカリア』*Philokalia* (「善愛」あるいは「美愛」の意)と題するギリシヤ語の書物として集大成されて、一七八二年にヴェニスで出版された。この題名の「美なるもの」あるいは「善なるもの」は神の国を指していることは言うまでもない。その後十年そこそこで、さらにロシア語に翻訳され、ロシア語圏に広く受け入れられたが、このことが、ロシア正教会へと、この祈りが拡まる緒口をなしたのである。奇妙なことに、この祈りが西方のキリスト教圏に齎らされるようになったのは今世紀も半ばに達した頃であった。そのわけは、この祈りそのものが単純なため、無智文盲の信者クラス向きのもので見做されたためと、十一世紀半

ば (1054 A. D.) のキリスト教会の東西分裂などにも帰せられるのではないかと考えられる。

『フィロカリア』(五巻)の内容は「イエスの祈り」を中心とした祈りの実践に関する教説で、この教えは一般に Hesychnon の名で知られている。これはギリシヤ語の「静寂」を意味する *hesychia* (hesichia) から由来する言葉である。この聖典は四世紀の聖アントニー St. Antony (251—356 A. D.) から十四世紀の聖グレゴリー・パラマス St. Gregory Palamas (1296—1359 A. D.) に至る、凡そ一千年の間に東方教会に輩出した三十五名の聖者の教説を集めたもので、最初のテキストはギリシヤ語である。

これは二人の編者、すなわち、コリントの大主教・聖マカリオス・ノータラス St. Macarios Notaras (1731—1805) と、アトス山の聖ニコデモス St. Nicodemos the Aghiorite (1748?—1809) によって二二〇七頁の大冊に初めてまとめられ、一七八二年にヴェニスで初めて出版されたもの。第一部は十八名、第二部は十九名の教父の教説を含んでいる。スラヴ語訳はキエフのバイシシー・ヴェリチコフスキー Paissy Velichkovsky (1722—94) によって、その翌年の一七九三年モスクワで出版された。これは三部に分れ、それぞれ五・七・二名の教父のものを収録している。ロシア語版は *106potoimoe* と題され、隠棲者テオフィアン大主教 Bishop Theophan the Recluse (1815—94) により、一八七六年から九〇年にかけて、全篇三千頁が五巻に分けられてモスクワ

で出版された。各巻ごとにそれぞれ五・八・十一・一十三名の教父の教えが収められており、この版は特に十九世紀初頭以降のロシアにおける僧院制度の再生と、「イエスの祈り」の実践に、基本的な重要性をもつものである。英語版は、ロシア語からの抄訳で、*Writings from the Philokalia—on Prayer of the Heart* と題して E・カドルボフスキー E・Kadloubovsky と G・E・H・パーマー G・E・H・Palmer により、一九五一年にロンドンの Faber and Faber 社から出版された。これは十二名の教父のものを収めている。次いで同じくこれら二人の訳者により、一九五四年に同所から *Early Fathers from the Philokalia* と題して、新たに出版されたが、これは、十一世紀にキリスト教が東西分裂する以前の教父たちの教え、わけても四世紀から七世紀位にわたる著述を編集したものである。この付録として、呼吸の回数以上に称名せよと教えたテサロニカの大主教・聖クレゴリー・パラマスの問答体による「心の祈り」に関する教えと、その生涯、及び、ギリシヤ語、スラヴ語、ロシア語の『フィロカリア』に収められた教父たちのリストが添えられている。ここでは九名の教父たちの教えを選んで収録している。その他ドイツ語、フランス語訳も幾種か出版されているが、現在の執筆者はそれらを確認するに至っていない。このように、『フィロカリア』が英・独・仏等の西欧語に翻訳されるに至ったことは、そのまま、その内容たる「イエスの祈り」が近代西欧世界に紹介された事を意味する。事実最近

「イエスの祈り」に関する書物の翻訳・研究・紹介や論考が徐々に増えつつある。これらは何れも今世紀に入ってからの現象であることは、殊に注意されるべきである。

### 「イエスの祈り」の濫觴と構造

キリスト教における祈りの位置は極めて重要で、祈りを除いたならばキリスト教は存在しないとすら言えるであろう。キリスト教圏で用いられている祈りの形は「主の祈り」をはじめとして数多く存在しているが、「イエスの祈り」も、祈りの一つの形として東方教会では特に重要視され、その形態に関する限り、『新約聖書』の次のような箇所が、その原型をなすものと考えられている。

一、エリコの市の塀の外で、盲目の乞食バルテマがイエスに向かってこう叫んだ。

“Jesus, Son of David, have mercy on me!” (マルコ一〇・四七)

二、イエスがツロとシドンとの地方へ行かれた時、カナンの女が出てきて次のように叫んだ。(後半を略す)

“Have mercy on me, O Lord, Son of David” (マタイ一五・二二)

三、イエスがサマリヤとガリラヤの間のある村に入られた時、十人のライ病人たちが遠くの方から次のように叫んだ。

“Jesus, Master, have mercy on us” (ルカ 一七・二三)

以上は共に共観福音書の中に記されている表現であって、自己ないしは身内の者が、肉体的病いから解放されたいという願望をイエスに訴え、憐れみを乞うている場面に用いられた言葉であるが、イエス在世中からすでに、「イエスの祈り」に甚だ近い、その原型がここに見られる。肉体的病いの有る無しに拘らず称えられる純粹に精神的な心情を籠めた祈りに比べれば、これらは、はるかに生々しく現実的な響きをもっている、と言えよう。その意味ではあくまでも原型にすぎぬことは言うまでもない。これは恰も「南無妙法蓮華経」という七字の題目が、中国の隋時代の天台智顛(538—597)の撰した『法華三昧懺儀』の中に、「南無釈迦牟尼仏」や「南無文殊師利菩薩」等と並んで既に見られるものの、これはあくまで他の多くの礼拝の儀式中の唱え文句の中の一つであって、相対的意味しかもたず、十三世紀のわが国における日蓮聖人(1222—1282)の創唱した純然たる宗教行としての専唱題目行とは質を異にするのと似たような関係にあると言えよう。共に言葉の上だけの類似にすぎぬ故偶然的性格の濃厚な原型としての言葉は、しかしながら、後世にいたってそののみが代表させられるに至る歴史的必然に思いを致す時、その原型としての意義は決して浅いものでないとも言えるであろう。原型と後世の象徴的宗教行としての称名の型態は、質的に明確な区別が一応なされねばならないが、その内面的、精神的な連続性、つまりその必然的な

繋がりの面にも留意せられる必要があらう。

「イエスの祈り」の唱え方は凡そ三段階から成っている。第一はこの祈りを声に出して何度も何度もくり返して唱えることで、これはいわば言葉ないしは言葉の面での条件づけに当る。第二はこの祈りを声に出さずに心の内で唱え続けることで、これは言葉を習慣づけることに相当する。第三は、この内面化が十分に果されると、祈りはいわば心臓の中に入り込んだ状態となり、鼓動と共に自然に唱えられるようになっていく。これは、称える祈りというよりは寧ろ自然に称えしめられる境地で、身心一如が達成された窮極の境地と見做されている。場合によっては「頭を下げて頸を胸に置くようにして、眼で心臓あるいは臍の辺を注視する」という姿勢が薦められることがあるが、これは単に精神集中の一助にすぎず、一部の人がには有用な補助的手段ではあっても、すべての人に義務的に課されるものではないという。

帝政ロシアの時代、一人の無名の在家の巡礼が、「イエスの祈り」を教える名師を求めて、キエフ、モスクワ、イルクーツクと一人旅をした体験を綴った『巡礼の道』*The Way of a Pilgrim* という小冊子があり、独訳・英訳・邦訳もなされているが、この中で主人公の巡礼がある老修道士からロザリオの助けをかりて、始めは毎日、三千回、次は六千回、次は一万二千回唱えることを教えられるくだりがある。そして遂には唱えはじめると心が歓喜で満たされ、すべてのものから解放されたように感じ、違った世

界に住む人のように生活することができたと記されている。これは日課念仏六万遍乃至七万遍を称えたといわれる法然聖人(1133—1212)の念仏行を想起させる。

『勅修御伝』(第二十二)には次のような法話が見られる。「念仏のかずは、一万遍をはじめにて、二万三万五万六万、乃至十万まで申候なり。このなかに御ころにまかせて、おぼしめし候はん程を、申させおはしますべし。」

「イエスの祈り」の末尾の「罪人われを憐みたまえ」の「罪人」が省略される場合もあるが、祈りであると同時に、それがそのまま信仰告白としての意義を担っている事実を顧みる時、この「罪人」の言葉があつた方がより適わしいと考えられる。もっとも、さきにも指摘したように、たとえ言葉として省略されたにしても、意味としては籠められていると十分に考えられるので、先ず末尾のこの言葉の、この祈り全体に対してもっている意義を考えてみたい。「罪人われ」と自称した事例は、『新約聖書』(ルカ 18・13)に出る「取税人の祈り」に見られる。そこでは、イエスがよく知られている「おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」という教えを説く直前に挙げたパリサイ人と取税人についての譬えの中で、取税人が言った言葉として表わされているものであるが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようとせず、胸を打ちながら次のように言う。

“God, be merciful to me a sinner!” (「神さま、罪人のわたしをお許しください。」)

これは目に見えぬ父なる神への呼びかけであるが、自己を罪びとなりとする自覚の存在が明瞭である。善導大師(623—686)の二種深信の教えは、まことの信心を裏付けるものとして、法の深信と共に、機の深信すなわち、自己自身の深い罪業感を重要な側面として指摘しているが、ある意味では、自己を罪びとなりとはつきりと認得できた人の心には正信が宿っており、その人には救いの光がすでに届いていると言えるであろう。曾我量深師(1851—1971)が一九五五年に八十歳で渡米された時、羅府東本願寺別院の輪番・伊東抱竜師夫人に法語を書き与えられたが、その一節に、「南無阿弥陀仏と一念疑なく自力のはからひをすてて、静かなる心を以て、仏願はくば、この罪深き私を助けましませと念ずるのであります」(傍点筆者)という言葉が記していられる。これは曾我師が念仏の信境に内在する機の深信を平易な言葉で表現されたものであるが、ここには明らかに「イエスの祈り」の中の「罪人われ」の自覚内容と一脈相通するもののあることが看取される。何らかの意味で自己の不完全性の深い認識に達した者でなければ、「イエスの祈り」に盛られている言葉の表わしている内容を、そのまま自己の内心の表白とは為しえないであろう。この罪びと意識は別に道徳的な意味合いに限られるものではなく、広く徳義的に見た自己の卑小さ、不完全さの実感の表白と不離なる

ものと見られうるであらう。

この「イエスの祈り」が最も短縮された場合、最後に残るべきものは「イエス」の一語であると言われるが、このことは同時に、この一語がこの祈りの中で最も重要な要因をなしていることを示すものであらう。超歴史的な「キリスト」(「救世主」、ヘブライ語では「メシア」と異なり、「イエス」の方は「歴史」に係わり合いをもっている。この点が、「南無阿弥陀仏」の「阿弥陀」と異なる点である。もっとも、この阿弥陀のいわれとして、法蔵菩薩の五劫・兆載永劫の思惟・修行というものがその背景として説かれているが、この歴史性ともいわゆる歴史的というよりは、むしろ形而上学的な時の背景であるには違いない。「イエス」には「ナザレのイエス」という明確な歴史性が離すべからざるものとして付帯している事実は注目されるべきである。「イエス」の原意は「救うひと」「救済者であるひと」であると言ふ。しかも、単なる「ひと」ではなく「神の子」としての人であり、同時に人となった神でもあるわけである。キリスト教徒にとって「イエス」の名は、同時にイエスの受難や十字架や復活や救済のわざを想起せしめるものである。この点においても、名は単に名ではない現実が、この語においても見出されるのである。つまり、この場合、名は単に名のみであるのではなく、名にまつわるすべてのものと共にあり、名のいわれの総体を含んだ名である。この事は、「南無阿弥陀仏」という名号についても同様である。浄土教徒に

とっては、名号とは、名号のいわれをも含めた名であって、決してレツテルや記号のごとき偶然的な、置換の利くものではなく、いわれと不可分の名号である。よって念仏を称え、聞く人は、同時に名号のいわれを聞いているのである。

親鸞聖人(1173-1262)は阿弥陀仏の方便法身という性格を明瞭にされたが、「イエス」の名にも歴史性を所縁として御名を保つ信者を超歴史的境涯にまで齎らす役割りがあると云われる。つまり仏教的に表現すれば、御名は法身と片時も離れぬ報身としての性格をもっているのである。また、史的イエスがすなわち救世主(キリスト)であるとすることは、キリスト教徒の信仰の核心をなすものである。したがって「Jesus Christ」(イエス・キリスト)と両者を同格に呼称することそのものが、キリスト教徒の信仰告白の主体をなすこととは言うまでもない。これは、「イエスはキリストなり」、すなわち歴史的人間とされていくイエスこそは、人間たると同時に神にましますという内容を宿しているからである。したがって「イエス・キリスト」の一言の宿す内容は極めて重いと云わねばならない。この事実は、たとえ、「キリスト」の称号が言葉の上から省かれても、内容的には不変と見做されるのである。「イエス」が最後まで残る所以はこのような消息を孕んでいるからである。

この場合の「キリスト」は、主の栄光を意味すると言われる。つまり超歴史的な救世主としての側面——神性——で、イエスが

本来神に属し、神から由来することを示している。これは同時に超人間的なわざ——奇蹟——のすべてをも含み、死者を甦らせ、病人を癒し、神の国の秘儀を人びとに教え、自らも死から甦えり昇天したという側面をさす。仏教的に言えば、方便法身としてのイエスの法身的側面と考えられる。

また「主」という言葉に關してであるが、相手を主と呼ぶ人は、すでに自らを僕の位置においていることを示すものである。このことからして、自らを僕の地位に置くことのできる人のみ、イエスを主と呼べるという事を意味するものである。すなわち、イエスを「主」と呼ぶことにおいて、イエスを比類なきものとして認め、自らが仕える姿勢にあることを表わしているので、この事實はキリストがイエスとして現に生きて在ることを証言していることを示していると言つてよい。仏教的に言えば、これは信の表われに他ならず、天親菩薩 (c. 350—450 A. D.) の「世尊我一心・帰三命尽十方・無礙光如来・願生三安樂國」の信心の告白における「世尊」の呼びかけを想起せしめる。「主」と表白できるところ、そこに信の現在が認められると言えよう。

### イエスの祈りと念仏

また同じく天親菩薩が『浄土論』で示しているいわゆる礼拝・讚歎・作願・觀察・廻向の五念門は、浄土に往生する五通りの方法と見做されているが、これは同時に一心帰命とどう事実の帯び

ている無数の意義のうち、五つの主なものを選んで示したものとも考えられるであろう。「イエスの祈り」も、屢々、讚嘆の歌でもあり、礼拝の行為でもあり、感謝の表白でもあり、懺悔の思いの告白でもあると説かれているが、正にそうあるべきことと思われる。「主の祈り」(マタイ 六・九)の中に「御名があがめられますように」「Hallowed be thy Name」という表現が含まれているが、「イエスの祈り」全体がまさにそれであると考えられよう。

「イエスの祈り」に關して、それは一応は信者が自らの口で称えているように見えるが、主イエスに呼びかけているもの、イエスを主と呼はしめているものは、実は聖靈に他ならないということが言われている。キリスト教の伝統においては、神の働きは「聖靈」Holy Spirit; Holy Ghost と呼ばれているが、これは、仏教的に表現すれば、「廻向」に相当するものと考えられる。廻向は阿彌陀仏の本願の表現であるからして、念仏を称える催しは偏に他方廻向によるという受取り方がここでは最も適わしい対照であろう。したがって「呼ぶ」は「呼ばれるなり」で、「イエスの祈り」の場合も、聖靈が信者の心の内において祈っていると云われるのである。この消息は『聖書』(エペソ 二・二三)にあるパウロの次の言葉をもって屢々説かれてゐる。

No one can say 'Jesus is Lord' except by the Holy Spirit. (聖靈によらなければ、たれも「イエスは主である」)

言うことができない。)。

浄土教においては、弥陀によって廻向された御名という思想がある。そしてこの名号は一切衆生を名によって救済しようと、法蔵菩薩の五劫の思惟と兆載永劫の修行の結果案じ出され、完成されたものであるとする。これはいわば、名号というものの所与性・他力廻向の性格を物語るものである。「イエスの御名」に關しても、東方教会では、称えることのみならず、御名自体も神によって人類に与えられたものであるという他力廻向の性格を重要視し、『聖書』の受胎告知のくだりを指摘する。すなわち「イエス」という名を考え出したのは、ヨセフでもマリヤでもなく、ひとえに神から由来するという事実が、天使ガブリエルが先ずマリヤに、次いで、夢の中で、ヨセフに始めて告げたという事実に象徴されているという。すなわち、ガブリエルは受胎前のマリヤに次のように言う。

「見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。」(ルカ一・三二)

また、ガブリエルは夢の中でヨセフに、マリヤがみごもった事実を告げて次のごとく言う。

「ダビデの子ヨセフよ。心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。

彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからで

ある。」(マタイ 一・二〇—二一)

一方、ルカは次にように証言している。

「八日が過ぎ、割礼をほどこす時となったので、受胎のまゝに天使が告げたとおり、幼な子をイエスと名づけた。」(ルカ 二・二一)

これらは、正教会で重要視しているように、「イエス」の御名の所与性・神に由来することを示唆していると見られ得るが、一方、浄土教の場合はどうであろうか。それは言うまでもなく、『無量寿經』に説かれている法蔵菩薩の四十八願の中の第十七・諸仏称名の願こそ、名号の阿弥陀仏に由来する消息を物語っているとして重要視するのである。すなわち、その願文は次のごとくである。

設たひ我わが仏ぶつを得えんに、十方世界の無量の諸しよ仏ぶつ、悉ことごとく我名わがなをし称しょうせずば、正覺しょうかくを取とらじ。

神は本来、法性法身のなもので、目には見えず、「もの」としてではなく愛の「はたらきかけ」としてのみ存在するものと考えられるが、名として人間の呼びかけの対象と成ったイエス・キリストとしての神は、いわば、相対世界に姿を示した神ということができよう。この場合、名は神の一部でなく全体でもあり、名において神は自己の全分を人類に捧げたのであるとも言われる。この捧げることが仏教的に表現すれば廻向であろう。親鸞聖人の『末灯鈔』(五)には、

……弥陀みだつ仏ぶつの御誓ごちかの、もとより行者ぎやうの計はかりにあらずして、

「南無阿弥陀仏とたのませたまひて迎へん」と計らはせ給ひたるによりて、……誓のやうは、「無上仏に成らしめん」と誓ひたまへるなり。……

と説かれてゐる、この「無上仏」が「自然」とも「涅槃」とも表現される法性法身のことである。ここには南無阿弥陀仏という御名の方便法身たる性格のいかなるものかが、平易に語られてゐる。イエスの場合も、ヨハネ伝(十四・六)に、

わたしは道であり、真理であり、命である。

と先ず本質においては、法性法身的なものであることを明し、次いで

だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。

と断言してゐる。これは、イエスこそ神に由来するものであるが故に、人びとをして神のもとに導き得る唯一のてだて(道)であることを明らかにしたものである。このような点にこそ、「イエスの祈り」の呼びかけが、目に見えぬ父なる神に対してはなされず、子なる神、すなわち歴史の上に姿を示したキリストたるイエスに呼びかけられてゐる所以が存するのだと言えよう。その根拠は、曇鸞大師(476-526 A. D.)の言葉を以てすれば、イエスの御名そのものが、「無上の方便」的性質、すなわち法身と別ではなく、法身に即した方便的性格のものである点に存すると見てよいであらう。

### 両者の相似点と相違点

筆者は曾て、英国の東方教会の一長老の著わした「イエスの祈り」に関する小冊子 *On the Invocation of the Name of Jesus* の和訳、及びその内容と念仏との比較論を発表したことがあるが(『大谷大学研究年報』第二十四集、pp. 69-159, 1971)、最近スウェーデンのペルロフ・ソエーグレン Per-Olof Sjögren 師の *The Jesus Prayer*, London, S. P. C. K., 1975 (スウェーデン語からの英訳)を読む機会を得た。これまでの叙述は主としてこの書に負う処大であるが、以下は、この書を読んで改めて感じた「イエスの祈り」と「念仏」の同異に関する覚え書である。

相似点の第一は、両者には御名に対する絶大な信が基調をなしており、共に御名を媒介とした救済が目ざされてゐるということである。しかも、共に御名に基いた最も簡潔な宗教的実践たる称名行を説いてゐる。他の一切の行を捨象して御名を称えることに教えの始終を包含せしめた点は、最も顕著な両者の共通の特質であると言つてよからう。エリアーデは、その名著『ヨーガ』*Yoga* (p. 65) の中で、インドのヨーガのプラナーヤーマの実修が、ヘシカズムに及ぼした影響の蓋然性を示唆しているが、筆者は、ヘシカズムの光明体験の強調とゾロアスター教との関連が、他方において注意される必要があるように思う。神なり、法性法身が御名の媒介によつて人間に知られるのみでなく、御名によつてのみ

万人の救済が可能という結論に達した宗教思想の所産である点、両者は疑いもなく軌を一にしている。第二に、称名は一応は人のわざであるが、その根柢を超越的なものの促がし（聖靈あるいは本願他力）によるとする点で共通したのもっていると言えよう。祈りを、聖靈の人の心内におけるうめきに譬えたりすることは、わが口から出る念仏を弥陀の呼び声と聞く浄土教徒の心情に通うものをもっている。第三に、両者とも数多く御名を称える初步的な教説をもっている点が共通している。禪は身業を入口として心の制禦に向うが、浄土教は口業を入口として同様の方向を旨とす。「イエスの祈り」は明らかに後者の性格をもつもので、最初は自力・漸悟的行き方であるが、常に心身一如のはからいを離れた境地を目ざす点が共通している。但しこの一種の自己修練法的性格を帯びた称名の実修は、真宗よりはむしろ浄土宗的であると言えよう。第四に、同一の称名の中に讃歎・懺悔・礼拝・感謝・信仰告白等の要素もあるのみか、祈願請求の利己的動機をも包含している点、両者は正に一致している。念仏の場合、定・散心で称える自力称名の機類をも称名に内在する本願力により、浄化して真如の門に転入せしめる効力ありとの絶対的な信を伴っていることはよく知られているが、利用されることをも厭わぬ性格の論理づけは「イエスの祈り」の場合明確ではないくらいがあるものの、その普遍的な包括性は、十分その段階までも考慮に入れられていることは疑いの余地はない。第五に、称名の実修に当って

は、善知識の教えを不可欠のものとしている点で両者は一致する。第六に、「イエスの祈り」が称えられたことが、神の宿願が実現したことと見る思想は、称名に本願成就を見る浄土教徒の心情に通うものがあることを見ることが出来る。これは「称えてから救われるのではなく、称えられたことは、すでに救われたこと」という思想に他ならず、同一の称名の根柢に機・法二種の深信の成立を見ていることになるわけである。第七に、僧院に起り、僧院を出て、広く一般在家信徒にも及んだ点で共通したものが認められる。しかし、「イエスの祈り」の場合は、その規模は浄土教の念仏ほど徹底し一般化したものであると思えぬふしがある。

以上はざっと相似点に関して概観して来たわけであるが、相異点の方に目を向けると、第一に、教義内容から見ても、親鸞聖人の念仏における還相重視——つまり世間に働き出る側面をもつてはじめて念仏往生の完成を見る思想からすれば、「イエスの祈り」は、この還相面の重視において念仏に一步譲るところがあるように思われる。すなわち、この祈りに関する教えは、主力が往相の側面に大部分注がれているといった印象が強い。宗教の本来の性格からすれば、いかにして救われるかは、利他の活動の十全なる發揮を措き置いたとは言い難いのは当然である。親鸞聖人の『教行信証』において、信心の実証が取扱われている証の巻は、この自利利他円満の徳が強調されて、救いの完成の唯一の目安になっている点を思い合わせると、自利々他の徳の獲得成

就こそは、眞の救済の完成に他ならぬという思想が、「イエスの祈り」の場合、余りにも乏しいきらいがある。第二に、念仏を称える実際の教えに関しては、法然聖人の「語灯録」には立ち入った指導が行われているのを見ることが出来る。しかしながら、微に入り細を穿った説きぶりの懇切さは、「イエスの祈り」の伝統には遠く及ばぬであろう。称名の伝統においては、称名の背景と意義に関しては豊富な教説が説かれてはいるが、初心者にたいする念仏するという單純な事柄に係わる実践的、即事的な説きぶりは極めて乏しいと言わねばならない。この理由の背後には、何らかの、両者の特質に基因するものがあるのかも知れないが、この対照は極めて著るしいものがある。第三に、称名念仏の普及の範圍の廣大なることに反し、「イエスの祈り」のそれは多分に極限されたものを感じる。もしこの祈りが眞に僧俗を問わず万人救済の普遍的宗教行であるとするならば、キリスト教圏に、現在以上の普及と展開を示しても不思議はない筈である。あるいは浄土教系の「往生伝」の類いに相当する記録が皆無あるいは僅少であるがためか、あるいは現在のところ知られず、紹介されていないがためでもあろうか。逆に、一生涯を無名のままで世間に知られず「イエスの祈り」に明け暮れた人びとは實際は、無数に存在したという事実があることはあつたとして、その記録が存在せず、著名な神学者・聖者の教説の記録のみに限られていることは、この祈りが眞に無名の民衆に及んでいたことを物語る、という見方

も出来るかも知れない。しかしながらこれまでのところ後者の見方を積極的に支持するほど多くの徴候は見当らない。第四に、以上のことからして、念仏に比べて「イエスの祈り」の歴史的發展段階はあらまほしき程度には進んでいないと見られぬこともない。換言すれば、僧院から出発したこの祈りは、在俗の人びとの間に紹介され、進出はしたものの、尚どこかに多分に在家止住の生活者にはびったりと来ない出家隱遁者の、あるいは靜寂・敬虔主義的殘滓が多分に残っているのではあるまいか。そしてこの段階を離脱して、眞に世間に参入する道が、現在少数ながら眞摯な唱道者たちによって開かれつつあるように思えてならぬ。この素朴な印象は、現在少数ながら現われつつある出版物の内容によっても裏付けられるような気がする。第五に、「イエスの祈り」の場合、念仏の裏付けをなす誓願に當るものの位置づけが明確になされていないようである。さきに御名の所与性を論じた所でも触れたように、イエスの御名の他力廻向的性格が、信徒の口上った称名との関連で説かれることが乏しいため、称名念仏が即ち本願成就の何よりもの徴であるという事実に相當する積極的意味づけが不足しているかに思われる。

以上極く大雑把に両者の特質を相似点と相異点とに分けて概観して見たが、これは極く一部の特性を取上げたにすぎない。更に歴史的・教義的側面において幾多の考慮すべき重要な問題が解明を待っていることは論を俟たない。それらの諸点に関しての考察

は他の機会を待たねばを得なら。最後でこの小文を綴ると折りの参考をせよと頂いた書物及び参考文献のリストを掲げよう。

今後この分野で関心を喚ぶ方々の参考となるもの非無し。

コンスタンチン・ドマコフの「正統派の参考文献」  
Ireneu Hausherr: "La Méthode d'oraison hésychaste" (*Orientalia Christiana*, IX, 2) Rome, 1927.

G. P. Fedotov (ed.): *A Treasury of Russian Spirituality*, Sheed and Ward, Ltd., London, 1950.

R. M. French (tr.): *The Way of a Pilgrim*, S. P. C. K., London, 1952.

Jean Gouillard: *Petite Philocalie de la prière du coeur*, Paris, 1953.

Ireneu Hausherr: "L'Hésychasme: étude de spiritualité" *Orientalia Christiana periodica*, XXII, Rome, 1956.

E. Kadloubovsky & G. E. H. Palmer (tr.): *Writings from the Philokalia on Prayer of the Heart*, London, 1957.

Vladimir Lossky: *The Mystical Theology of the Eastern Church*, James Clarke & Co. Ltd., London, 1957.

Constantine Cavarnos: *Anchored in God*, Astric Publishing Co., Athens, 1959.

John Meyendorff: *St. Grégoire Palamas et la mystique orthodoxe* (Maitres Spirituels, Editions du Seuil) Paris, 1959.

Ernst Benz: "Nembutsu und Herzensgebet" pp. 126-149, 『公教文化』(鈴木大拙博士追善記念特刊)。鈴木学術財団「東京」一九六〇。

A Monk of the Eastern Church: *On the Invocation of the*

*Name of Jesus*, London, 1961.

Timothy Ware: *The Orthodox Church*, (Pelican Original A 592) Harmondsworth, Middlesex, England, 1963.

E. Kadloubovsky & G. E. H. Palmer, (tr.): *Early Fathers from the Philokalia*, London, 1963.

E. Kadloubovsky & G. E. H. Palmer (tr.): *Unseen Warfare*, London, 1963.

John Meyendorff: *A Study of Gregory Palamas*, The Faith Press, London, 1964.

Bishop Ignatius Brianchaninov, tr. by Father Lazarus: *On the Prayer of Jesus*, London, 1965.

Alla Selawry: *Das Immerwährende Herzensgebet, Ein Weg geister Erfahrung*, Otto Wilhelm Barth Verlag, 1970.

Emmanuel Jungclaussen: *Aufrichtige Erzählungen eines russischen Pilgers*, Verlag Herder KG, Freiburg im Breisgau, 1974.

Archimandrite Kallistos Ware: *The Power of the Name*, S.L.G. Press, Oxford, 1974.

Per-Olof Sjögren: *The Jesus Prayer*, S. P. C. K., London, 1975.

(註文のついでに、この書は、大谷大学教授)